# 担い手に出向くTACの取り組み

JAあだち野 営農経済課 課長　矢部達也

**T(とことん)A(会って)C(コミュニケーション)**

「TAC」は、地域農業を担う皆さまのパートナーです。

JA全農は、「地域農業の担い手に出向くJA担当者」の愛称をTAC(タック)として「JAグループにおける担い手対応の目的と手順」を明確にするとともに、「TACシステム」の導入により活動を支援する体制を整備しました。

JAあだち野(旧JA上尾市)においても2003年に「農家は、JAの資材は高いと批判するばかり。JAはその声を受けるばかり。なぜそういった批判が出るのか、どのように批判に応えられるのか。分析が全くできていなかったため、情報を収集・提供する体制の必要性」を感じJAとして専任部署を立ち上げました。

私は2004年４月の定期異動により、現在の営農経済部門に着任しました。以前は主に支店の信用・共済部門にいた私には、本店営農経済部門での仕事は、戸惑うことが多かったことを覚えています。特に、提出期限の迫った書類の遅れには、驚きました。金融業務では、時間との戦いで書類作成し提出していましたが、営農経済部門はどうなっているのか？これでは、組合員に信頼される仕事は出来ないと感じ、営農経済部門の全職員に期限厳守を徹底しました。

TACに対しても、「TACシステム」への訪問活動入力による行動管理と金融渉外担当者と同様に、定例会議やミーティングの実施、日報や月報の作成を義務付けました。また組合員に対しての訪問活動の意味合いをTAC自身が考えることを意識づけしました。これによってTACが地域の「多様な担い手」に対してどのように対処すべきか？訪問活動のなかで感じたことからTACが進むべきテーマなどを考えさせ、チームとして取り組むべき方向性やJAグループとして課題となっている話題を考えさせるようにしました。

TACとして、担い手への訪問活動を通じ情報提供や情報収集を行い、TACシステムを活用し、積み重ねたデータをいかに多く蓄積しマーケティングに活用するかがポイントになると考えます。

いま、JAあだち野では、日本なし彩玉(埼玉県オリジナル品種)を「黄金の雫」として愛称をつけTACが中心となってブランド化に取り組んでいます。

①平成19年からTACが中心となって都内の老舗高級果実店で販売する。

②平成22年９月から東京銀座三越にオープンした「みのりカフェ」でのジェラートアイスの原料として供給する。

③平成22年10月から地元酒蔵株式会社文楽との農商工連携によるリキュール原料として供給する。

などの成果が見えてきました。

JAが地域農業振興のために何が出来るか？組合員とTACが、一緒に考え行動する。

そして、農家と消費者を結ぶ役割をTACの活動を通じて進めてゆくことが大切ではないかと考えています。

（やべ　たつや）



ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。